



手作りおもちゃで遊ぶ子ども。
ネパール、ゴールドアップ難民キャンプ。
©上岡伸輔

じるその悲劇は私たちに少なからぬショックを与える。記憶に爪を引っかけるように彼らの姿が頭の中に居座る。しばらくのあ

い。メディアの報じるその悲劇は私たちに少なからぬショックを与える。記憶に爪を引っかけるように彼らの姿が頭の中に居座る。しばらくのあ

波つ子の小競り合いが何百年

ささやかな幸福も、そこでは

(文藝春秋別冊2007年5月号「ミッション・ポッシブル」難民キャンプ訪問記から抜粋)

関連情報：
<http://www.bunshun.co.jp/mag/bessatsu/bessatsu269.htm>



難民、という言葉から私たちがまず連想するのは、着の身着のままに陸に流れ着いたボートピープルや、急ごしらえのテントで雨風を忍ぶ瘦せこけた人々、黒柳徹子さんに抱かれた子どもの姿などだろうか。命からがら母国より逃げ、国境を越え、ようやく辿りついた先では厄介者扱い。国際機関の支援がなければ今日食べるものもない。メディアの報

いでは。しかし、やがては忘れる。あの後、あの人たちはどうなったかな、などと思いつくことはない。あの人たちはどうなったのか？ 無論、母国へ帰れる人もいない。内戦が終わった。政策が変わった。和平協定が結ばれた。様々な理由から状況が落ちつき、生まれ育った国でもう一度やりなおすことが可能になった人々。一方、帰れない人々もいる。

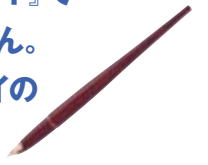
民族同士の対立というのは、私たち日本人にはいまひとつピンとこないところがある。たとえば江戸っ子と難波っ子との間で紛争が起こり、一方が政権を掌握、敗れた側が弾圧を受けて近隣国へ逃れ、難民キャンプでの生活を強いられる—なんて話

も前から続いていたとしたら？ 各々が異なる神を信仰し、互いに通じ合えない言語を用いているとしたら？ 江戸っ子である私の肉親や友人が難波っ子に殺されてしまったとしたら？ 政権を握った難波っ子が強硬な同化政策を行い、江戸っ子に大阪弁やツッコミ、関西風うどん汁などの強要を始めたとしたら？ (中略)

出来ることをしていきたい。

「作家とは便利な職業でペンと紙さえあればどこにでも仕事ができる」と語ってくださるのは、

『風に舞いあがるビニールシート』で直木賞を受賞された森絵都さん。2007年2月にネパールとタイの難民キャンプを訪問された森さんの目には何が映ったのだろうか。



書くことを通じて伝えてゆきたい

ペンと紙の記録



作家 森絵都さん
Eto Mori

©酒井俊春



難民の青年からスポーツを通じた啓発活動の説明を受ける。
ネパール、ゴールドアップ難民キャンプ。
©上岡伸輔

猛な風に煽られるビニールシートのようにべらべらと吹き飛ばされてしまう、と。今回、訪ねたネパールとタイのキャンプに風はなかった。猛な風が吹きぬけてからすでにそこでは十数年が流れて、キャンプはひとつの村と化し、人々はその土地にしっかりと根を張っているかのように見える。が、しかし彼らの置かれた「難民」という寄る辺のない状況は十数年前と少しも変わらない。膠着状態の中で彼らは逆に新しい風を待っているようにも思えた。第三国定住は良い風になるのだろうか。或いは、いつかは母国へ帰れる日が訪れるのか。深刻になるうと思えばいくらでもなれる難民問題についてこれからもときどき深刻に考え、彼らの今後を気にしていきたいと思う。ときどき—というのは、常に深刻であろうとする無理が生じてきつくなり、途中でギブアップしかねないから。末永く、ときどき、自分なりのスタンスで出来ることをしていきたい。